

教員養成課程における研究法指導の意義と課題：
英語教育リサーチメソッドの実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亘理, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007871

教員養成課程における研究法指導の意義と課題

－英語教育リサーチメソッドの実践－

Purpose and Issues on Teaching Research Methods in a Pre-service Course:
A Practice of “Research Methods in TESOL”

亘 理 陽 一

Yoichi WATARI

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

Abstract:

This study aims to report an attempt to teach research methods in TESOL to pre-service teachers. Thirty-eight third-, or fourth grade students, from various majors at a university in Shizuoka, participated. The objective of this course is for students to learn the necessary concepts and ways of investigating and measuring effectiveness of their practice, learners' proficiency, learner factors, and so on with concrete quantitative and qualitative research methods. Focusing on their conceptual transformation, reflective essays on each lecture and their analysis and presentation were examined. Their development and difficulty suggested that this course could enhance teaching-relevant knowledge and skills for teacher candidates, but many challenges still exist both in theory and practice.

1. 課題の設定

本論の目的は、3・4年次専門科目「英語教育リサーチメソッド」の実践を通じて、教員養成課程において（教科教育）研究法を指導することの意義と課題を考察することである。

そもそも、教員養成課程の専門科目において研究法を学ぶ意味は何だろうか。もちろん当該授業には、卒業研究等、それ以降の専門的な学習に資する知識・技術を提供するという役割がある。しかしここではより一般的に、英語教師（志望者）が研究法を学ぶことの意味を考えたい。

Williams（1999）は、個々人の信念や行為を反映され採用された「個人的理論」（personal theory）と、ある分野で容認された知識を構成するものとみなされる「公共理論」（public theories）を区別し、実践を媒介とした両者の関係を図1のように整理している（Williams, 1999, p.15）。

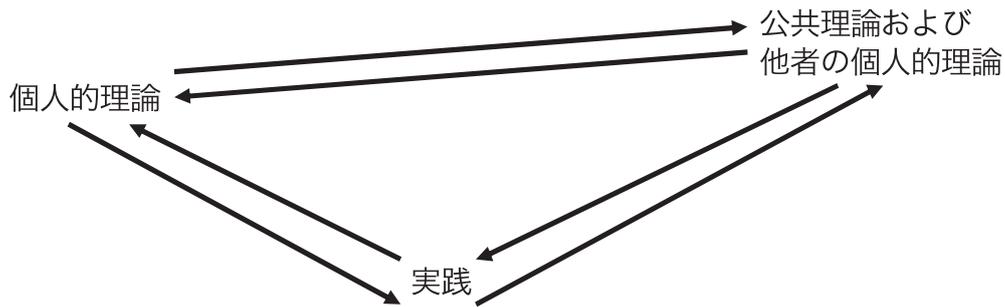


図1. 公共理論と個人的理論の関係

これは、実践に裏付けられた研究活動によって自らの個人的理論を一般化し、公共理論や他者の個人的理論になんらかの影響を及ぼす過程（generalizing）と、実践を介して、公共理論や他者の個人的理論が各人の個人的理論に組み込まれるようになる過程（localizing）があることを示している。ここにおいて「理論」と「実践」の不毛な二項対立は存在しない。

この点について、既に勝田（1970）は次のように述べていた。

教育の理論は貧しいという声が、実践者たちのあいだから発せられてすでに久しい。教育学者は、抽象的な論議や外国の研究の紹介に浮き身をやつしている、あるいは、現場の問題にはこたえられないし、現場の実践を指導することもできない——こういう批判は（中略）理論構成の困難な時代だといってすましてよいものだろうか。もちろん、そういうことはない。実践が進むためには、どうしても理論が必要なのである。それは、積み重ねられた経験を正しく評価し、整理し、さらにつぎの実践に方向を与える、そういう役目を持っている。その理論が貧困だということは、けっきょく経験自身を行きづまらせ、その行きづまりをつきやぶって新しい展望を開くことを不可能にする（勝田，1970，pp. 3-4。下線は引用者による）。

勝田（1970）の言葉は主として教育学（者）に向けられたものであるが、（英語）教師にとっての実践的探究も同じであろう。各人の現在に照らして過去をふり返り未来を見通すためには、その橋渡しをする「手段」が必要となる。研究法の学習には、その手段の個人的理論としての形成という側面があると言えるだろう。

さらに、二杉（1993）の

私は「所定の科学的技術、理論的知識、合理的技能」を教師が「レポーター」として持つことが決定的に重要なことだと思う。「レポーター」を豊富に持つから、教師は「自律性」を持つ判断主体になりうる。いや、そもそも個別の「問題状況」を判断するために、「レポーター」が有力な武器になるのではないか（二杉，1993，p. 105。下線は引用者による）。

という指摘に鑑みれば、英語教師には多様な研究法の学習が求められる。それは、教師が専門職として直面する複雑さに対峙する上での根幹をなしているとさえ言い得るだろう。さらに二杉（1993）は、「所与の理論に対する『自律性』を獲得する過程」としての「熟考」と「『自律』

する主体による授業の内在的な検討」としての「省察」を反省的实践家としての教師の中核に据えているが、これを可能にすることが、英語教師が自分の仕事にやりがいを見出し続けるための条件だと考える（二杉, 1993, p.104）。所与の理論を相対化し、授業の内在的な検討を表面的なレベルに留まらずに行っていくためには、個人的理論を公共理論・他者の個人的理論に絶えずぶつけ、それをわがものとしていくことが必要である。

教員養成課程の専門科目において研究法を学ぶことには、単なる個別知識の獲得を超えた、以上のような意味が含まれると考えている。

2. 科目の概要と構成

「英語教育リサーチメソッド」は、3年次前期の選択専門科目である。学習内容は、教室で学ぶ中・高・大学生の外国語能力はどの程度なのか、外国語学習の何が難しいのか、授業で試みたことがどの程度効果があったのかといったことを客観的に調査・評価するために必要な諸概念、データの収集法・処理法、および量的研究、質的研究、アクション・リサーチの考え方・技法である。本論で報告する年度の履修者は38名であった。

授業実践を振り返り改善していくためには、「楽しかった」だけではなく、その授業を受けることで学習者の知識・技能がどう変化しているかを知る必要がある。仮に自分自身ではある研究手法を使わなかったとしても、他人の研究結果や学習者の評価に対して価値判断を行えるようになる必要がある。本授業では、必要に応じて適切な方法を選べるよう、あるいは報告された内容を読み取って適切な判断が下せるよう、試行錯誤をしながら具体的な研究のデザインとデータ分析作業に主体的に作業に取り組むことで、各分析手法を自分のものとすることを期待した。そこで、この授業を超えたリファレンスの役目も兼ねて竹内・水本（編）（2012）をテキストとし、全体を次の3つの柱で構成した。

- 調査・研究に必要な概念を概観し、データの収集法・処理法の理解を深める（第1回～第5回）
- データを実際に収集・分析しながら各手法の考え方と技法を学ぶ（第6回～第11回）
- 具体的に研究課題を立て、模擬的アクション・リサーチを実施する（第12回～第14回）

各回の授業は、以下の標題のもとで展開された。学生は、授業の内容に基づく8つのデータ分析・報告課題に取り組み、事前の提出ないしは個人・グループでのプレゼンテーションを準備して次の授業に臨むことが求められた。

- 第1回 リサーチとは何か
課題1-1：仮の研究課題の設定、当該課題に対する「信念としての知識」・「権威としての知識」の整理
- 第2回 研究課題の明確化
課題1-2：尺度水準の分類と例示
- 第3回 記述統計と推測統計
課題2：ヒストグラムの作成、「偏差値」の計算
- 第4回 統計的仮説検定の考え方
課題3：母分散が既知の場合の平均値の検定（片側検定および両側検定）

- 第5回 データ収集の尺度とコード化
課題4：質問紙のデータ入力とクリーニング
- 第6回 観察調査（1）
課題5-1：授業観察の準備と実施
- 第7回 観察調査（2）
課題5-2：報告・議論を踏まえた観察記述のまとめと観察調査についての所見レポート
- 第8回 質的研究の計画・実施・分析（1）
課題6-1：インタビュー調査の準備と実施
- 第9回 質的研究の計画・実施・分析（2）
課題6-2：質的研究法にもとづくまとめ・分析とインタビュー調査のふり返しレポート
- 第10回 量的研究の計画・実施・分析（1）
課題7-1：t検定・分散分析・ χ^2 検定による分析・報告準備
- 第11回 量的研究の計画・実施・分析（2）
課題7-2：報告・議論を踏まえた分析結果の要約と研究の課題についてのレポート
- 第12回 アクション・リサーチ（1）
課題8-1：Research questionsの設定，質問紙・テストの準備
- 第13回 アクション・リサーチ（2）
課題8-2：データの分析，報告準備
- 第14回 アクション・リサーチ（3）
課題8-3：報告内容の要約とふり返しレポート
- 第15回 研究報告のまとめ

学生は最後に、次のいずれかについて最終レポートを作成し提出することが求められた。

- (1) 研究課題を設定し、授業で収集・入力したデータを用いて再分析する（授業で紹介したいずれかの手法を必ず使用すること）。
- (2) 各研究手法について紹介したモデル論文のいずれかを直接参照し、概要をまとめて論評する。
- (3) 授業で紹介した各研究手法について、テキストの記述をまとめ所見を述べる。

各回の授業の終わりにコメントペーパーを書いてもらい、コメントの一部または全体を（名前は挙げずに）次の授業の配布資料にFeedbackとして記載した。事前提出が求められる課題や全員で共有したい成果物、参考文献に関しては、学内LMSや担当教員の個人Webページ、SNSサイトのグループページを活用した他、課題への取り組みを支援するため、授業を録画した映像をいつでも何度でも閲覧できるよう同グループページにアップロードした。

3. 授業の過程

ここでは、「英語教育リサーチメソッド」において試みた（萌芽的な）個人的理論を公共理論・他者の個人的理論に絶えずぶつけ、それをわがものとさせようとする取り組みの結果を、上述の柱に沿って学生のコメントによって描写する（下線は全て引用者による。各回の配布資料および投影資料は、<https://sites.google.com/site/doeyowata/classes/2013/rm>を参照されたい）。

3.1. 調査・研究に必要な概念の概観，データ収集法・処理法の理解

テキストの竹内・水本（編）（2012）と Seliger & Shohamy（1989），三浦ほか（2004），山田・村井（2004）を中心に，問いや作業，学生同士の意見交換を挟みつつ，講義中心で進めた。各回の内容に対して，学生たちが自分なりに英語教育（研究）と結びつけた理解を図ろうとしている様子が見てとれるが，同時に統計的な発想・概念の難解さから意味づけに苦慮している様子も垣間見える。

第1回コメントより抜粋：

- [1] いまの学校での英語の授業についての問題をグループごとに意見交換ができたのでそれぞれがどう思っているかが分かり，自分の為になりました。自分の考えを発言できる良い機会にもなり，授業にも積極的に取り組むことができるので良かった。
- [2] 「英語教育リサーチメソッド」は授業名を聞くだけではよくわからず，ただ単位のためと思って初回の授業に来てみることにしたのですが，今日の授業を受けてとろう！と思いました。教師はとにかく情熱が大事！というような（それこそ）信念を持っている人が多い気がしますが，科学的な立場に立ってやればもっと効率がいいと思います。
- [3] 英語を教えるにあたって，どこが課題であるかを考えた上で効果のある授業内容を考えることがこれからできると思いました。授業の中で湯治のことがありましたが，結果は一部分だけでなく見落としがちな部分も含めてみることで正しい結果がみえてくるといことが初めて分かりました。そしてそれはとても大事なことだと感じました。

第2回コメントより抜粋：

- [4] （中略）4年生の卒論発表会に行くと，発表会を聞いていて「ん？」と思うものと「この研究はイイ」と思うものがあります（自分の興味のないトピックについてもです）。でもなんでそう思うのか，どこに説得力を感じているのかを深く考えたことはありませんでした。おそらく研究のオキテのようなものを知った上で研究をするかしないかで大きく変わってくると思います。また結果的に，研究法の知識があった方が研究も効率よく進むと思います。
- [5] 英語教育リサーチメソッドという名の授業なので，英語を使うんだなと思っていただけど実際は統計の話が多い。卒論の課題をどうするのか，順序のたて方，定義の仕方，対象の範囲のしぼり方など学ぶべきことが多い。抽象的なことを学ぶので具体例をメモしていきたい。
- [6] 先生からたくさんの情報が発信されるので，必死で，無意識に集中していて授業があったという間でした。楽しかったです。学習者の興味をひき，ひきこむ授業づくりのお手本にしようと思った。内容に関しては，今まであたりまえのように流していた“質問”というものの分類，研究の分類，数字の尺度をあらためてよく考えてみて，よく考えてみるとそれぞれ全然ちがっておもしろかったです。
- [7] 恋愛力があるかについてグループで話し合い恋愛力の定義の議論をして，みんなそれぞれ基準がちがいがい，なるほどなと思うことが多かった。（後略）

第3回コメントより抜粋：

- [8] Excelの使い方よく分からないので、誰かにききながら覚えていきたいです。独立変数と従属変数の説明が分かりやすかったです。データの信頼性を得るための作業って大変なんだと実感しました。
- [9] 偏差値の出し方などデータの比べ方を学んで、データの信頼性や妥当性について今まであまり考えていなかったなと感じました。自分でデータを見極めるための知識が身に付いたようでとても得をした気分になりました。今回学んだ技術・知識は、教員にならないにかかわらずとても役に立つ内容だと感じました。
- [10] 今日の内容はとても難しかったです。しかし、偏差値をだすことの意味とそれが出るまでの過程が分かりすぎいと思いました。単純な結果だけではよくなく、いろいろな視点から考えていくことが大切だと思いました。先生になったときにこの子はできる子だというのは全体やそのテスト内容などからみていかなければならないということが分かりました。
- [11] 今まで、点数だけを見て得意・不得意を判断していました。塾講師のアルバイトでも点数だけを調査して平均点は聞いていなかったのですが、今日の授業を受けて、偏差値を出すと表だけで得意・不得意に見えていたところも引っくり返ることにおどろきました。初回の授業で、表面でなく裏も考えるということの大切さを学びましたが、今回の授業でもまたそのような点の大事さを感じました。

第4回コメントより抜粋：

- [12] 今日の内容は確率が入り、なおかつ専門用語が多く難しく感じました。ですからまず自力で学習してみようと思いました。今回の宿題はとても遠まわしだが、とてもおもしろそうだという印象を受けた。仮説を立てる上でまず否定的仮説を立て、それを棄却するという方法は高校の数学で習った帰納法ににているという印象を受けました。すぐに答えが出ない分、ゆっくりたしかめながら宿題を行いたい。
- [13] 毎回だんだん内容が難しくなってきて大変です。課題をするのにもひと苦労だし、ついていくのがやっとです。この知識がどう英語と結びついていくのかまだよく理解もできません。もっと英語についてやると思っていたので難しいデータばかりの学習でなかなかモチベーションがあがりません。この知識が英語にどう結びついていくのか、どう使うのかももう一度考え直します。
- [14] 母集団分布の仮定・推測の方法をきちんと身に付けておくと、学校現場ですごく役に立つと思いました。子どもたちの学習状況について、学習の効果を調べるときに、1人1人の成績の伸びはテストの点数や、学習にのぞむ姿から見えやすいけれど、クラス全体の伸びを考えるとときには、この方法でやらないと分からないと思います。「～だと思われる」をつきつめていくのはもやもやが続いて大変だなあと考えました。難しい。

3.2. データ収集・分析、各手法の考え方・技法の学習

観察調査については、Nunan (1990) および Allwright & Bailey (1991) を中心に英語教育研究で用いられてきた観察手法を紹介し、授業者の選定・依頼に基づき大学の教養英語科目の授業を観察した。質的研究については、教育実習直後の受講者に他の学生がインタビューと

なってインタビューを実施し、そこで得られたデータを竹内・水本（編）（2012）で紹介された手法で分析した。量的研究については、竹内・水本（編）（2012）とMackey & Gass（2005）およびMackey & Gass（Eds.）（2012）の例や説明を用いながら主要な検定・分析手法を解説し、t検定、分散分析、 χ^2 検定、相関分析、回帰分析についてはExcelでの具体的な操作手順と併せて導入した。

第6回コメントより抜粋：

- [15] 授業見学にもいろいろなやり方があり、目的に応じていろいろなシートを使い分けているのだと思った。教育実習の時の授業見学は適当に気がついたことや教師の発言・生徒の反応をノートに書いていただけだったので、今度のシートを用いた見学が新鮮で楽しみです。
- [16] エスノグラフィーによる観察調査は何度かやったことがあったが、他にも様々なメリット・デメリットのある調査法が知れてよかった。今後、もし教員になった時にも、他の先生方の授業を観る機会があると思うので、2種以上の調査法が使えるようにしたい。
- [17] 観察記述の方法についていろいろな種類があることを知り、とても興味がわきました。私はボランティアや実習で、“児童が発信すること”について重きを置いてきたので、SCOREを使っていろいろな子どもの発信の回数を調べたり、またそれに基づいて矢印がつかなかった子が発信するためにどのような支援を行えばよいのかの参考にしたりしたいなあ…と思いました！！
- [18] 観察の方法の多様さに驚きました。特に、トレーニングを要するCOLTやTALOSの様な方法は根気が必要なのだと思います。研究者として問われる資質の1つかもしいろいろと勝手に考えていました。それぞれの方法の利点・欠点を踏まえて、補い合って調査することが大切だと思いました。（後略）

第7回コメントより抜粋：

- [19] 授業観察の発表会をして、同じ先生の授業でも私が観察した授業では、英語を話す生徒があまりおらず日本語での会話が中心になっていたのに対し、1コマ目を観察した人の報告によると、そのクラスは英語を主に話していたと知り、おもしろいなと思いました。同じ先生が同じ内容を扱っているのに生徒がちがうと全然違った授業になるということを実感し、その根拠をもっと研究してみたいと思いました。その生徒の背景、生徒の構成、先生の指導の仕方など2つのクラスを比べてみることでもっと深くまで探ったらおもしろいだろうな…と思いました。
- [20] 授業観察のふり返しを行ったことで、各授業で同じ教師、同じ授業内容(木1コマ/2コマ)でも表われる結果が全く異なることが分かりました。また、それぞれの観察者によって調査結果にもバラつきが見られるため、1人の観察者でより妥当性が高い調査をするのはとても大変かと思います（自分の信念の知識をくつがえる結論なら良いかも…）。それぞれの調査で自分がサンプルに求めることや、サンプルについての背景知識が必要かと思います。
- [21] 今日の授業をうけて、観察や研究の発表会に参加することの重要性に気付かされた。自分が想定してもいなかったような、新しい観点を見つけたり、異なった規準でobservation

scheduleのチェックを入れているため、他の人の意見を聞き、自分の意見を聞いてもらうことで、独りよがりでない良い研究になって行くのだと思った。

第8回コメントより抜粋：

- [22] 今日の授業ではインタビューされると急に言われておどろいた。しかし実際やってみると実習をふり返る良い機会になったし、教師への意志などスラスラ言える自分がいておどろいたしうれしかった。質問者も答えやすい質問と答えにくい質問があったが、「例えば中学校ではどうですか？」とおぎなってくれることで答えやすかった。メモをしながらだったが、自分の言ったことをくり返し言ってくれたり、ほどよい間をとってくれて次の答えも言いやすかった。今回は答える側だったがもし機会があったら質問者にもなってみたい（後略）
- [23] 自由回答形式の質問でYesとNoの間の感情をきくことの大切さが分かった。インタビュアーがうなずいてくれたり、目を見て質問してくれたり、回答者側としては気持ち良かった。今までは聞きたいことをストレートに、一番最初もしくは一番最後に聞くのが良いと思いこんでいたので、周りから攻めて核心を探る、聞きたいことは真ん中で聞くというポイントが知れてとても役に立ちました。
- [24] 今日の授業でインタビューについて学習した。その中で、今までの人生の中で受けてきたインタビューで、今回実際に行った活動で近いと感じたのは雑誌のインタビューを受けたのに一番近かった。カフェテリアでやり、自分が落ち着く場所でのインタビューなど、すごく似たインタビューを受けた事があるので、プロとアマチュアの違いを感じた。それは切りかえしの質問や質問の分かりやすさなど違いを感じた。

第9回コメントより抜粋：

- [25] ばらばらだった意見・コメントも意外な共通性をもっていて、1つにまとめた時、研究のおもしろさの1つを見た気がした。
- [26] 実際にKJ法に挑戦してみて、うまくまとめられていたグループとそうでないグループとで、分かりやすさがだいぶ違うなということを感じました。KJ法でまとめることになれていないので、なかなか時間がかかりましたが、使えるようになればだいぶ頭を整理するのに役立つなと思いました。これはデータ分析においてもそうだし、自分の思考の整理にも使えるのかなあ…というふうに感じました。
- [27] データの分析は今まで技術科ということもあり数学のことだけをやっていましたが、言葉のデータではどうするのかということをととても疑問に思っていました。これからは教師になる者として生徒たちの感想とかもKJ法のような視点で見れるようになりたいです。

第11回コメントより抜粋：

- [28] 相関分析でのRANK付けは自分が教員になったときは、すごく役立つなあと思いました。教育実習で担当教員が年間の指導計画を作成しているのを見て、どんな力をつけたいか先を見通して計画、実践していく力が教員には必要だなと思いました。
- [29] 点数のちらばり具合を数字や数式で表すことができるのがなんとなく不思議だった。でも考えてみると $y=ax$ （比例）なども相関関係であり、今まで習ってきたこととあまりか

わりないのではないかと思う。今さらですが、英語の授業かと思いきや数学や情報のような授業ですね。とても興味深いです。

3.3. 模擬的アクション・リサーチの実施

アクション・リサーチについては、受講者の教育実習経験を出発点として、三上（2010）、Burns（2011）および藤田（2013）を参考に一連の流れと必要な作業を説明した。

第12回コメントより抜粋：

- [30] 「～生徒が～できるようにするためには、どのような指導が必要か」というのは、他の授業で指導案を書く際にも使っていて、指導法を考える研究で一番直截的に授業に関わっていて興味のある研究法かなと感じた。しかし、主観が多く含まれてしまうと思うので難しく感じる。
- [31] 研究課題の設定と予備調査の計画をグループで決める作業だったがけっこう細かくて難しい。最重要課題とリサーチテーマがごっちゃになっていてとまどった。アンケートの内容作成も難しいが、聞きたいことをストレートに聞くのではなく、逆の質問や多面的な聞き方をすることを工夫したいと思う。
- [32] アクションリサーチのテーマが中々決まりませんでした。アンケートの対象がRM受講者なので、英語に興味があるかどうか、などの質問をすると天井効果になる可能性が高いので、そこまで考えてみるとテーマの決定が難しかったです。
- [33] 私たちのグループは、普段手を挙げない生徒が自発的に授業参加し、自分の意見を発表できるようにするためにはどのような指導が必要か、ということ調べることにしたのですが、アンケートを用いて調査するのにアンケート項目を考えるのがすごく難しいだろうな…と思いました。聞きたいことを直接的に聞いたらこちらが知りたいことが何なのか気付かれてしまって正確な（？）データがとれないかもしれないので、聞きたいことをいかに直接的ではない表現の仕方で聞くかを意識してアンケートを作りたいと思いました。

第14回コメントより抜粋：

- [35] 得た情報をうまくまとめられなかった…。なにかを分析するにはしぼることが大切だと思った。なんか、今日の発表をみて、得た結果から「こうして授業をすればこうなる」というのがいまいっつながっていない気がして、みんなの仮説が具体的でないと思った。もっと調べて、重ねて、調べまくってやらなきゃいけないな。
- [36] アクションリサーチでテーマ設定する時、できるだけシンプルにすることが大切だと思いました。複数の要因が入っていると複雑で何のリサーチをして何を改善したいのかよく分からなくなってしまう恐れがあるのかなと思いました。
- [37] Aさんのグループの統計的有意差 ($p = .003$) には驚いたし、なんだか羨ましかった。もちろん有意差があることだけがいい訳ではないことを承知の上で。今日の各グループの発表を聞いて、みんなクオリティが高かったが、特に、リサーチクエスチョンが良いところは説得力のある仮説設定ができていたように感じた。
- [38] 今回の発表の多くは発表についてだった気がする。しかし、取ったアンケートの内容も

違えば考えたことも違っていた。にも拘らず結論は比較的似たような気がする。教育学部在籍の今の大学生は同じようなことを問題だと思い、同じような解決方法を考えているのかもしれないと思った。

第15回コメントより抜粋：

[39] 理論やしくみを聞いている分には、本当に楽しい授業だったが、実践する段になると難しい。最初のt検定の計算でトラウマを与えられたような気がするので、来年からのフィードバックにしてください。

[40] 今まで難しい課題にたくさん取り組んだり、今まで見たことのないような事柄をたくさん学んできましたが、今となるとあっという間だったなあ…と思います。この授業で学んだ内容は個人的にすごく難しかったなあ（理解するまでが大変だった）としましたが、これから卒論を進めるにあたり、もし自分が分析することになったらとても役立つと思うし、分析をやらなくても論文を読む時にきっと役立つなと思います。（後略）

[41] この授業を通じて、いろいろな場面でみるデータや論文を以前とちがう目でみれるようになりました。これはつまり何を言っているんだろう、ここから何がわかるんだろう、本当に正確なデータかな？という具合に…。あふれる情報を冷静にみることができるようになれるかなと思います。

4. 実践の評価と課題

上述の感想を見る限り、本実践は当初の目的をある程度は達成したものと言えるだろう。しかし、少なくない学生が訴えているように、彼らの多くにとって具体的な分析手法を英語教育に引きつけて理解するのは容易ではなく、作業量も多かったと判断できる。ここから、今後向けて課題を指摘しておきたい。

まず、英語教師にとっての探究に統計的仮説検定の理解・習得はどの程度必要かという問題である。学生の戸惑いや困難は、単なる概念理解・操作の難しさだけでなく、要因を統制しない（できない）実践的探究にそもそも統計的仮説検定が適しているのかという疑問を含んでいるように思われる。

アクション・リサーチの妥当性（validity）として次の3つの要素があることが指摘されている（Burns, 2011）。

- trustworthiness：分析・報告・解釈が、（その文脈で生じた結果・知識の）ごまかしのない再構成になっていること
- worthwhileness：やることで関係者に生じる価値がやりがいに結びついていること
- credibility：他者に研究結果を信じさせるのに必要な論証と過程（内的・外的）があること

本実践を通じてcredibilityの必要性と手順については多くを提供されたが、学生がそこに十分なworthwhilenessを見出し、「わがこと」としてのtrustworthinessと結びつけられたかどうかに関しては課題が残る。この段階では、記述統計に特化して目の前の学習者のより良い把握に務めるという授業構成も一計かもしれない。

次に、英語教師（志望者）はどうやって授業の改善に適切な課題探究の手法を判断できるようになるのかという問題である。分析手法を（最低限読み取れる程度に）知らなければ要不要

の判断ができないという意味で本実践は一定の役割を果たしたと言えるが、試行錯誤的にアクション・リサーチを繰り返していれば（自己と他者の）実践を見る目を深め、適切な分析手法を選択できるようになるわけではないだろう。その意味で、悪く言えば総花的に手法を網羅しようとするのではなく、ある先行研究の目的・内容・方法を批判的に追体験する追試（replication）的研究に取り組めるような授業が、本授業かあるいはその前後に配置されることが望ましいと言える（Porte, 2012）。

5. 参考文献

- Allwright, D., & Bailey, K. M. (1991). *Focus on the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burns, A. (2011). Action research. In B. Paltridge & A. Phakiti (Eds.), *Continuum companion to research methods in applied linguistics* (pp. 80-97). London: Continuum.
- 藤田卓郎 (2013). 「ARがARであるために必要なこと」第43回中部地区英語教育学会（富山大学）課題別研究プロジェクト「英語教育研究法の過去・現在・未来」報告資料。
Retrieved from http://www.urano-ken.com/research/project/project2013_3d.pdf, July 24th, 2013.
- 勝田守一 (1970). 『教育と教育学』岩波書店.
- Mackey, A., & Gass, S. M. (2005). *Second language research: Methodology and design*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Mackey, A., & Gass, S. M. (Eds.) (2012). *Research methods in second language acquisition: A practical guide*. Chichester, West Sussex, UK: Wiley-Blackwell.
- 三上明洋 (2010). 『ワークシートを活用した実践アクション・リサーチ』大修館書店.
- 三浦省吾・前田啓朗・山森光陽・磯田貴道 (2004). 『英語教師のための教育データ分析入門：授業が変わるテスト・評価・研究』大修館書店.
- Nunan, D. (1990). *Understanding language classrooms*. New York: Prentice Hall.
- Porte, G. (Ed.), (2012). *Replication research in applied linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Seliger, H. W., & Shohamy, E. (1989). *Second language research methods*. Oxford: Oxford University Press〔土屋武久ほか訳(2001). 『外国語教育リサーチマニュアル』大修館書店.〕
- 竹内理・水本篤 (編) (2012). 『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』松柏社.
- 山田剛史・村井潤一郎 (2004). 『よくわかる心理統計』ミネルヴァ書房.
- Williams, M. (1999). Learning teaching: A social constructivist approach – theory and practice or theory with practice? In H. Trappes-Lomax & I. McGrath (Eds.), *Theory in language teacher education* (pp. 11-20). Harlow, UK: Longman.